

3

終身にせむるを留めらるのつらさかといふ
てある。それゆゑ折止する。こつと出まらるつこ
こつけ思つた方々責任でやる。

△

一人残さんたしつ、苦しみ——それ七非亭
であらねばならぬ。恐らくその現亡

せむの面影は一生を身についで回らたら
う。決してそのあたりから離れて行かぬた
らう。彼の女との交遊の起る處に、その女

か出て来たたらう。出立でけらるはしこし、
出立にせむるつが絶えず心理の再現を為

すであらう。それと思ふと恐ろしい。嘗て
私はさういふ生残つこしつが苦しみの記述を

たこしがあつたか、
すゝ形に五つて行かぬ。蓋しその面影は

つさりと見えて来るといふことか喜いてち
つた。つまり誰か二人は、
でが、行つてしるものついで離れらるつで

る。あつて、
くせつ女を捨て、その女との

る。あつて、
くせつ女を捨て、その女との

事せられし行つて形か歴々として手に取らば
うに見えらる。女は身をもつて夫への二合の言
をえつて遺書の中は完全に残してある。

△

心中の言はけ、口には心平地を語つる。
やうに誰れ思ふは、室はさうでけらるて、

その二人の行方か、読手てあり室経書
でちるといふこと、二は二のびしわめる。所有

するといふこと、自分へのルワにするといふ
こと、さういふこと、こゝに浮い、一種の満足と

感するりてちる。それは空想といへば言想
でちる。何れ死んでけ所有し、何れ生いり

てちる。しかし死んでけ所有し、何れ生いり
してお互ひに死ぬ。胸は書てらるり、水に身

を投する。五りすれば、五のて満足たと、ふり
りてちる。

従つて右鳥氏、培合は、女は有鳥氏
マラる人、ラブ、こちやに命を要し失け

るはれげらるる、
まの
まの
まの

これ言は

11

さる主観 ~~あつた。~~ ^{従つて} かんけとてしエケ

スヒリア ~~主観的詩人~~ としこの ^に 比す

へくしエかつた。 ^{否、} さる比するの ^開 遠

でちる。 ^{たしか} 標半はさるいふ風に見

て、 ^{いろいろ} 例を挙げ ^て その主観詩人

たることを ^辨 じた。 ^{その} 當時にし ^れ け

白い批評だと思つて ^{みた。}

田室隆 ^{その} 近松の ^紙 経さ ^か ちる ^{ので}

あり。 ^通 俗ふり ^か ちる ^{ので} あり。 ^世 間並

が ^ち る ^{ので} あり。 ^た ら ^い ふ ^を ^世 間並 ^に 比

軽し ^て 見る ^と 面白。 ^{同じ} 元強 ^の 言 ^を

唱つ ^て ころ ^で し、 ^か ら ^し 違 ^ふ ^の 思 ^は け ^を

匠 ^と び ^ち る。 ^匠 給 ^に け ^決 ^し ^て ^近 松 ^の ち ^を

る ^ち、 ^し ^に ^煙 ^煙 ^は ^る ^い。 ^心 中 ^を ^ど ^に ^置 ^し

て ^し ^些 ^味 ^を ^持 ^つ ^て ^る ^い。

近松 ^の 心 ^中 ^に ^對 ^す ^る ^見 ^方 ^は、 ^世 間 ^並 ^で ^る

た ^け ^を ^し ^た ^け ^人 ^を ^動 ^か ^し ^こ ^と ^更 ^之 ^て ^い ^心

中 ^の ^流 ^行 ^し ^て ^仕 ^方 ^の ^よ ^の ^つ ^こ ^の ^高 ^詩

こ ^の ^こ ^と ^で ^あ ^る。 ^そ ^れ ^か ^つ ^ま ^り ^心 ^中 ^を

運 ^び ^視 ^し ^て ^る ^結 ^果 ^が ^あ ^つ ^て、 ^か ^ん ^け ^を

れを意堂の極致だとしてみる。

△

し、し、この極致はさう、阿呆には點點け

る。私意は心中ときこむに對してし

つと考つて見れば、けらるる。心中はまこ

意の争闘の壹形である。否、更に言

え控れば、且つに見た意堂の影、交

換である。てんごに、肩の心たけを抱い

て、そして死んで行く、形がある。延つて

ワマンナイニス、である。外國人五どの相

對死を野蠻としてみる。さういふ形

を言ふのである。

私達は若、此には、よく、さういふ二

と意味を、持つて、その時、心持は、どうだ

らうとか、死ぬ、前、に、體を、合はせらたら

うとか、いや、そんな、區、區、月を、場合に、面

しては、それ、ころ、の、沙汰、では、あるまいと

か、いや、それ、け、心中、す、前、に、け、屹、度、體

を、合、は、せ、ら、う、だ。それ、け、確、か、だ。その

証極け沢山ありと云つゝ、
 三つに二つに問題に
 るのであつた。まゝに
 した境に非常なロマ
 ンチイツクに神秘に
 見えて、こゝちろで
 あり。

△

瘧病の中心を齎す
 ことには、い
 せうか？

たこへて見れば、
 玩弄に玩弄の
 さねた心の境

さるる二つは、
 てせうか？

さうするに、
 心中し、
 現世の批評

らるる五つで
 心の中し、
 心の境

といふことに
 心の中し、
 心の境

さう言へば、
 さうですわ
 心の中し、
 心の境

私けかりきつて、さうし、心中を起
塔合は、多くけ三角乃至四角の争闘の
結果やろる。それ、つたといふことを持
ち出した。

竹屋の塔合を、それらしいですわ。

あれは、ちこれ、すき。あれは、あんな

るに、大い強さをし、くつて、おれ、二と、たん

て、せろ。あれ、一、非、心中、すろつ、し、り、だ

つ、こん、で、す、わ、

さ、ろ、た、つ、て、言、え、ん、で、す、け、ど、し、

喜、び、す、わ、

それ、に、心、中、の、い、よ、と、非、幸、に、口、マ、

チ、ウ、ツ、ク、に、美、し、い、詩、で、し、ち、ろ、や、ろ、に

き、こ、え、ろ、け、れ、ど、し、崖、際、を、見、る、と、あ、ま

り、お、い、し、ん、で、は、あ、り、ま、せ、ん、と、

それ、は、さ、ろ、で、す、わ、

あ、ろ、し、街、路、に、ろ、つ、こ、こ、の、あ、り、ま、す

か、い、

一、度、あ、り、ま、す、

あ、ろ、を、言、つ、こ、私、の、腕、の、前、に、は、

金、匙、

